平和を保障し、文明の進歩を迅速ならしむるは、單に吾等自身の利益のみでなく、吾等所謂文明人が蒙昧なる半開國民に對する義務である、責任である。見よ、世界十六億の生靈を有すと雖も眞に文明の進歩に貢献しつゝある國民は果して幾何なりや。そは只黄白人種の僅か一部のみではないか。人類の大多數は未だ眠つてゐる。未だ自意識的に生命の眞價を認め得ずして漂々浪々、徒に時日を空費するのみ。吾等は警鐘を鳴らして彼等を覺醒せねばならぬ。吾等は智識の光と友情の温たかみを以て彼等を誘掖せねばならぬ。思へ、彼等が吾等と相提携して文化發展の事業に參加するとしたならば、世界の文運はどれほど急遠に進歩するであらうか。

世界の平和、全人類の覺醒と共力一致、文明の進歩と人格の完成、そを一言にして掩へば世界同胞主義の發展、そは誠に吾等をして、歐洲戰爭の殘害日に

甚しきを極むると共に、一層痛切に、一層深刻に、其必要を感ぜしめる吾等の希望である、理想である。

吾等の美的生活

伏しては溪流潺々金玉の聲あり、仰いでは蒼穹星燦爛、靈氣横溢して東天瑞光を放ち、生の搖らめき匂やかの露に濕めりて、彩雲紅を染めたる曙の景。靜寂の氣分西山の麓を靄め、群鳥家路に急ぎ、夕陽一時の名殘を惜みて江灣に漂ふ夕榮の色。日盛りの蟬聲、秋の夜の虫音、白雨の一過、六華の霏々、春宵の朧月、秋の夜の月光、大海の洋波、泰山の英姿、河邊の翠綠、湖畔の月、平原の羊群、田園の眺望、山頭の奇岩、海濱の白砂、芳香馥郁たる花の姿、美音麗朗なる鳥の囀り、何れか吾等の美的憧憬を促さないものがあらう。

財祿の末事に拘泥て、澁面常に銅臭を放つ市井の匹夫も、一日の暇を偷んで海岸に、溪谷に、田圃に、湖邊に、俗塵を遠ざけて自然の懷に入り、綠草の

床に横はりて大地の溫みを感じ來らば、多年の勞苦立ろに消え失せ、清淨の思ひ清鮮の大氣と相呼吸して血躍り肉動く。新生命の閃き吾等が鈍くなつた感情を俄に引立て、俗界の俗事にたづさはつて眼前の小利、目前の小康に安ずる我が現在のはしたなくも見え、如何に我が眼界の狹少になつてゐるかに今更の如く驚くであらう。

偉なる哉自然の美、そは心靈の奥底に響き渡りて萬法一如の愛に宇宙を抱擁させる。自然詩人ワアヅウオースは彼の有名なるチンタン アベイの詩に曰く『此美はしき自然の樣々、我が他處に在りし間も盲に美景の夫れではなかつた。寂しき一室に閉籠り、又は市井の雜鬧の中に在りても、我は退屈の折節に尙此景色を追想し、血動き情いらだちて、快感を禁じ得なかつた。そは昔の平和に歸りきて吾が一層純潔なる思念に通ひ、善き人の生涯に少からぬ感化を與へし

名もなき聊の親切事のやうな多くの忘られた感想を呼起した。いや是ればかりでなく、我は此景色から一層壯嚴なる意味に於て今一とつの恩惠を得しことを感ぜざる能はぬ。そは他でもない、此神祕の重荷、此不可解の世界の重荷を輕からしめるやうな信樂の氣分で、又細やかなる情緒が柔かに我等を誘導するが如き靜謐なる享樂の氣分で、此肉體の氣息も血の循環も一時は中止されたかの如く思はれるまで、我は肉に眠つて靈に醒め、調和の力强き、悅樂の力鋭き眼を以て萬物の生命を觀ることであつた、』即ち

"These beauteous forms,
Through a long absence, have not been to me
As is a landscape to a blind man's eye:
But oft, in lonely rooms, and 'mid the din

Of towns and cities, I have owed to them
In hours of weariness, sensations sweet,
Felt in the blood, and felt along the heart;
And passing even into my purer mind
With tranquil restoration:—feelings too
Of unremembered pleasure: such, perhaps,
As have no slight or trivial influence
On that best portion of a good man's life,
His little, nameless, unremembered acts
Of kindness and of love. Nor less, I trust,
To them I may have owed another gift,

Of aspect more sublime; that blessed mood,
In which the burthen of the mystery,
In which the heavy and the weary weight
Of all this unintelligible world,
Is lightened:—that serene and blessed mood,
In which the affections gently lead us on,—
Until, the breath of this corporeal frame
and even the motion of our human blood
Almost suspended, we are laid asleep
In body, and become a living soul:
While with an eye made quiet by the power

Of harmony, and the deep power of joy,
We see into the life of things."

と。是等はげに自然美の極致に沒入して、『詩的霊思邪なき』境地に逍遥する達人の聲で、自然に對しても斯の如き宗教的渇仰の域に達し得たならば、人生の眞味げに掬々たるものがあるであらう。尙彼は此詩の終に『自然の崇拜者なる我はその禮拜を捧げるに倦むことなく、一層温かなる愛を捧げんとて、然り一層神聖なる愛の一層深甚なる熱情を捧げんとて、今此處に來たのだ』

"And that I, so long
A worshipper of Nature, hither came
Unwearied in that service: rather say,
With warmer love—oh! with far deeper zeal

Of holier love."

と云つてゐる。あゝ何と壯嚴なる、且つ清淨なる自然美の讃歌ではないか。

されど思へ、世には自然美に優りて尙美はしき人間美のあることを。只それ外的の美に就て之を云ふも、清楚たる白百合、嬋娟たる櫻花、艶麗なる牡丹、清秀なる梅花、何れか若き乙女の無邪氣なる美はしさに如くものあらんや。泰山の莫姿、大海の瀁々、朝暾の壯嚴、月輪の清澄、何れか堂々たる男子の眼光爛々、威儀溫容相備はれるに如くものあらんや。人は自然美の極致であつて、神は間接に自然に現はれ給ふも、直接に人間の美に自顯し給ふ。然り人間の美よ、そは宇宙進化の道程が造出した最大傑作の藝術品であつて、花鳥の美も山川の美も到底人間の美に追及ぶことは出來ぬ。されど人間美の燒點は其形態美にあらずして、精神美にあることを忘れてはならぬ。卽ち人情美が此世の最大

美なることを忘れてはならぬ。

人情の美、嘻、これ人生の欲求する最大のものではないか。正義や愛や謙遜や感謝や柔和や勇氣や宥恕や義憤や、又犧牲の心、奉仕の念、同情の涙、共同の精神、何れか美ならざるはなく、何れか我等の憧れを繫がざるものはない。願くば吾等をして自然の美を見る詩眼なきを嘆せしむる勿れ。されど人情美の清きに心動かざる者は木石にも劣り果てたる死物なるを覺らしめよ。而して人情美の極致は清き愛の一辭に歸す。聖き愛、そは人生の凡ての善きものを抱容して尙餘りあり。願くば吾等をして詩人ワアヅウオースが自然に對して抱さし如き清き愛を捧げて人間美を謳はしめよ。然り最も清き愛を捧げて最も多くの人々を愛せしめよ。これ卽ち吾等の美的憧憬である、美的生活である。

社會主義の眞髓

一　定　義

社會主義を狹義に定義すれば、そは資本の力に對抗して、日々の生存競爭に從事せる勞働者の經濟的救濟を目的とする學說及實行である。一層適切に之を云へば、そは生產と分配の機關を社會に委ねることによつて其目的を達せんとするものである。スケルトンの言に從へば、そは私有財產と自由競爭の上に建てられたる萬般の產業組織の非難を意味し、資本主義の眞相を暴露して、之に代るべき產業組織を提供し、且つ資本主義に對する宣戰の布告を意味すと。スバアゴオは曰く、そは勞働者に對して一層善き衣食住を與へんとする物質的利

得を意味するに外ならずと。而してそは歷史上幾多の經濟的叛亂の形を取つて現れた。粗笨な物質主義の世に生れたが故に、其初めは必然的に只人間の物的要求を標榜せる正義の旗下に集中してゐたのであるが、歩一歩、智的、道義的、精神的意義を加ふると共に、そが利害關係の範圍をも、著しく增大したのである。

二　史的色彩

近世に於ける社會主義の鼻祖たる一人は多分佛人サンシモンであらう。彼は十八世紀の末頃に『各自の技量に從つて地位を與へ、仕事の出來高に從つて報酬を與へよ』といふ意味の格言を宣傳した。今一人の佛人フリエはファランヂなる地方自治體を稱へた。同時に英國のロバアト　オウエンは社會的罪惡の根柢を人の勞力と機械との競爭にありとなし、機械を勞力に服從させることを以

て人類の幸福を保障し得べしと云つた。ルイ　ブランクは一千八百三十年の革命の時に、政府より供給せる資本を以て『社會工場(ソオシヤルウオオシヨツプ)』を建設せよと建言した。彼が社會主義の本領は『技能に從つて(勞力を)取り、必要に從つて(報酬を)與へよ』と云ふのであつた。稍後れてブルウドンは、私有財産を以て盜取なりとなし、無政府主義の綱領を提供した。

千八百四十八年英國に於けるクリスト教的社會主義運動は大に此主義の意味を深めた。彼等は曰く社會の眞の楔鎖は經濟的のものにあらず、道德的、精神的のものである。自己は自己の爲に存在すといふ原理によれる自我主義は、畢竟社會の潰滅を促がすものなりと揚言した。彼等の所謂社會主義は、社會改革にクリスト教を適用せしものに外ならぬ。ドイツのラサラは普通選擧と政府よりの資本を得て、一の勞働者保護組合を建設せんことに盡瘁した。國家社會主義者

なるロバアツは社會に與へし貢獻の如何に從つて、普通勞働時間に對する賃金の法定を要求した。近世社會主義者の棟梁なるカアル　マアクスは急進改革派の一人で、產業社會を資本家の羈絆より脫せしめんが爲に現存社會組織の速滅を期待した。マアクスとエンゲルが千八百四十八年に公にした『共產黨（實は社會黨）の宣言』は後日世界各國に散在する勞働組合の間に、國際的協同を遂げんとする大計畫を屢々繰返へさせた。

三　中心問題

上述の如く、稍時代を異にして現出した幾多の異れる計畫を以て尙社會主義は資本主義と自由競爭、獨占と特權に反抗する鬪爭に一層其努力を集中した。一般的に觀察すれば、社會主義の起因は機械の發明によりて發達せる近時の產

業的進化と共に、勞働者及資本家なる二個の社會階級間に蟠まる溝渠が絶間なく擴張したことにある。今や人民の大多數を占むる一階級は饑渇い淵に迫れるに反し、數に於て如何程もあらぬ他の一階級は、單に他人の勞働の結果を餘分に味ひつゝあるのみならず、只其收得欲を滿足させんが爲めに、徒に殘部を蓄積しつゝある。

生產は二個の方便を必要とする、そは即ち機械と勞力とである。資本家は前者を提供し、勞働者は後者を供給する。資本家が使用した資本に對する相當の金利を收め、勞働者が勞力に對する相當の賃金を收めた後、剩餘の純益は由來誰れ人に屬すべきであらうか。これ問題の燒點である。されど如何にして之を解決すべきか。或者は曰く、資本主義を撲滅せよと。他の者は曰く、これら二階級の協同一致を計るべしと。其一例を示せば資本家が損失の危險を冒して投下

した資本に對しては金利のみならず、保險料までも充分に與へた後、殘餘の收益は勞働者の技量に歸すべきものとして、之を資本家の手に留めさせず、勞働者に與へしむべしと。されど嗚呼如何にして此事を實現し得るか。法制の力に依賴すべきか。將又資本の國有によりて成就し得べきか。何れにしても單に法律の力により强制するだけでは決して其良果を結ばざるべきは慥かである。

資本國有は國民の經濟的競爭心を阻喪させて、生產事業の活氣を害毒する恐れがある。何となれば　張合ひと云ふ如き意味に於ける競爭心の幾分は經濟事業に限らず、何事にも必要なるが故である。又他面に於て現在の資本主義を默認して賃金の增加を法律的に强制するも、資本家は物價の騰貴を以て之れを迎へ、從つて通貨購買力の減退は直に勞働者の生活費の尨大を意味し、結局何の得る所なくして終るであらう。勞働と資本の問題は單に經濟上の問題にあらず

して、直に道德宗教の問題を惹起すのである。

四　問題の範圍

前項に述べたる所此主義の諸問題の核心であるが、同時に社會主義は其利害關係の範圍をあらゆる社會改造の諸問題に押擴げた。貧者を奴隷的取扱ひより救出さんが爲に生產、交換、分配の手段を社會に引渡させんとする死活問題の外に、社會主義は多數政治ではなく多智政治を眼目とする眞の民主政治や、普通選擧の問題を包含してゐる。そは婦人を男子の權力より解放させるが、尙家庭の神聖を保たんが爲に、男女の分業を必要とし、生命の必須なる保護（プレサヴエシヨン）と永續（パアペチユエーション）（生殖）の二大分業の自然的要求なるを認め、男子は前者を、女子は後者を以つて其天職となすことを社會上一層切實に感得させんとする運動をも包含

してゐる。又そは時間や勞銀、ツラストやシンヂケエトの問題の外に、少年勞働の問題、宿無し孤兒や老人の生活問題、無智な或は亂暴な親達の親權行使に容喙して、小兒を保護すべき事や、公衆衛生、家宅の構造や清潔、傳染病の豫防等の如き問題から、貧民學校や、盲啞、低能兒の敎育問題に至るまで、其領域を展開し得る。又そは軍備の全廢、關稅の廢止、度量衡及通貨の統一や、國家主義の撲滅、世界主義の發揚、公娼根絕、酒煙草の嚴禁などの如き問題をも當然其內に包含することが出來る。兎に角貧者や窮乏者の社會的救濟を意味する生活の改善や、社會的罪惡の社會的剿滅及び社會的能率（ソオシヤルエフヒシエンシイ）の增進を目的とする凡ての社會改良事業は當然社會主義者の頭腦を煩すべき問題である。

五　其特色

されど社會主義は屢々誤解されるやうに、必ずしも現在社會組織の急激なる革命を意味するものではない。之に反して、そは其賢明なる熱心家をして益々合理的、科學的方法を用ひて、社會進化の遲緩なる道程を迅速ならしめんとする努力に外ならぬと思はせるやうになつた。そは『集產主義』(コレクチヴヒズム)の意味に於て、協同的生產及均等的分配を期待せるが故に、一面に於ては『個人主義』の正敵であつて、他面に於ては自由競爭主義の强敵である。

乍併そは屢々混同され易き『共產主義』とも違ふ。共產主義は全然私有財產を否定するのであるが、社會主義はスパアゴオの云へるが如く、主として社會的に生產される財貨生產手段の公有を期待するの外、私有財產を非議するのではないから、前者よりは一層多く個人の自由を認めてゐるのである。又社會主義は無政府主義ではない。ヴエダア曰く、無政府主義の下には働かうと働くまい

と各自の氣儘であるが、社會主義の下には、不具不能者の外各人悉く、直接に或は間接に生產者でなくてはならぬ。怠惰者は攝破され、不埒者は鞭打されて、どうしても働かせられるのである。

されば社會主義の經濟上に於ける根本原則は卽ち下の如くである。不具者の外、人は皆各自の職業に從事し、彼の勞働の結果たる報酬のみを享受すべきである。社會主義は敢て個人の自由を褫奪するものではない。否、そは拘束の增加によつて却て逆說的に自由の增進を促すものである。社會の與ふる親的保護の下に却て自我實現の機會を均等ならしめるものである。見よ、野蠻人民が吾等の如き繁瑣なる社會の拘束を受けざる自由の野に生活して、如何に不自由なる且つ憐むべき野獸的生涯を送りつゝあるかを。社會主義の理想國に於ては法律も規則も個人の自由の重荷とはならぬ。そは單に善行の手引をする智惠才覺

に外ならずして、吾等が良心の衝動以上に吾等を强制するものたるべからざるを期するのである。

六　其精神的意義

上述の如き幾多の經濟的、或は政治的救濟の方法を以てするも、單なる物質的慰安と富饒とは社會主義の最後の目的ではない。經濟的救拯は只手段のみ。其目的は人格の向上である、完成である。歴史の示す如く、極貧の汚穢中に嘗て天才の生れた例しはない。日蓮やパアンスの産れし家庭は清貧なりしも、赤貧洗ふが如きものではなかつた。才幹の發展は或る程度まで家計上の自由を要する。されば社會主義は自我實現の爲に必要なる機會を各人均等に分與せんとする努力に外ならぬ。それ『幾多無言のミルトン』が貧困の奥底に生きながら埋

沒されんことを恐れるからである。

げに社會主義の基礎は佛國革命者の稱へし如き『自由と平等と友愛の理想』の上に立てられてある。然もそは平等を讃美するも團栗の背競べを祈求するものではない。機會均等の保障によつて、出來得るだけ自由に個性の天才を發揮させようとするのである。自由と平等の上に立てる人類同胞主義は神を父と仰ぐ人道の理想を根據とするが故に、社會主義の根本原理及理想はクリスト敎のそれと相異ることは出來ぬ。されば社會主義の目的は宗敎のそれの如く、神の王國(父なる神の家庭)を全人類の社會關係に活現することに外ならぬ。

されど其實現の手段に至りては、宗敎と社會主義と大に其趣きを異にしてゐる。社會主義は周圍の事情を改良して、個々の才器と性向に從ひ、外より內に人格の完成を扶助せんとするのであるが、宗敎は短刀直入的に、神と人とに關

する明確な智識を與へ、人間の價値と尊嚴と責任の偉大なるものあるを解得させ、內より外に個性の改革或は發展を計らんとするのである。社會主義は生命の社會的外面を重視せるに反し、宗教は個々の心靈と宇宙の大靈との內的關係を主眼とする所、そこに大なる違ひがあるのである。されど屈竟の目的は二者同一であるから、吾等は今社會主義を定義して、單に經濟的救濟を意味するものとはせず、一層宏濶に社會情態の改善に依つて、心靈の知的、道義的、精神的解放を目的とするものなりと云ふのである。

或る社會主義者は云ふ、吾等は餘分の富を分配せよと迫るのではない、適當の勞働と其報酬を與へよと叫ぶのである。吾等は慈善を哀求せず、正義を要求すると。されど社會主義が人類一般の同情心にさざし、其根柢が『妙味と光耀』(スウイトネスアンドライト)と に對する憧憬や、人類の向上を思ふ熱情の間に深く潛んでゐる以上は、社會主

義の精神は、單に或る階級の人々の爲に權利義務を要求するとか、或は社會全般の爲に個人の自由を束縛すると云ふが如き律法的の主義主張ではなく、そは世界同胞主義の發展にぶち込んだ深甚なる信仰を燈臺とせねばならぬ。そは恰もイエスの敎へたやうに、家族關係に於ける父母的兄弟的の愛を一切の社會團體の指導的精神とすることである。

七　問題の解決

今社會主義者が此の如き崇高なる精神を持ち、クリスト敎者の協力を得て活動したならば、彼等の待望せる產業界の外的變革の大部分は無用の汰沙となるであらう。資本主義それ自身は必しも罪惡ではない。問題の急所は其資本を行使する人々の精神的態度にある。もし社會主義が資本の行使を個人の手から社

會の手に移し得たとするも、如何で其の成功を謳歌することか出來よう。社會は幾多の個人から成立つてゐるから、各個人が利己主義、金儲主義を根據として經濟活動に從事する間は、結局何の甲斐もないであらう。如何に民主的な政府の下に於ても、各人が悉く支配者となることは出來ぬ。資本家なる少數者の手から奪ひ取つた資本は、再び政府の役人たる少數者の手に委せねばならぬ。處で吾等は現在の社會組織に於いて、資本家に正直な社會的勤務を要求するだけ、それだけ政府の役人に正直な勤務を要求せねばならぬ。

吾等の願ふ所は組織の變更ではない。心情（ハート）の改革である。現在の社會組織を取扱つてゐる人々の心情の廓清を要求するのである。もし然らば、そは宗教の勢力や感化を以て資本家其他の生産業者を敎導し、彼等の把持せる現在の地位を棄つることなしに、社會主義者の希望と目的とを彼等の精神に自顯させんこ

とを急務とするのである。産業制度は個人の私事ではない、個人の財産欲を滿足せんが爲に濫用すべきではない。そは主として社會公共の便宜を目的とする營業なることを知り、一に博愛の律（おきて）を遵奉して彼等の實業家的生涯（ビジネスライフ）を送らんことである。もし然らずして徒に正義の急激なる主張をなさば、そは單に多くの犧牲者と僞善者を作出すの外何の効果もないであらう。所詮社會主義は速にクリスト敎化されねばならぬ。

宗教と社會

宗教には個人的に罪の贖ひを目的とするといふ、悲觀的な分子が段々少なくなつて、宗教は結局社會的なりといふ思想が盛んになり、『クリスト教と社會問題』とか『社會主義とイエスの倫理』とか云ふ如き書物が出版されるやうになつた。教會は慈善事業に手を染め、クリスト教青年會の如き半宗教的事業が益々盛んになる傾向を示してゐる。米國の或る教會の如きは會堂内に玉突場ありと云ふ有様で、單に説教のみでなく相當の娯樂をも供しなくてはならぬと云ふことになつた。又斯る娯樂の手蔓によつて求道者を增加しようとするのは、一種の教會政策であると見るやうになつた。

一教會の内にも幾多の團體があり、各方面に部署を定めて社會關係を複雜に

し、之によつて一人でも信者、いや多くの場合に於て、寧ろ教會員の增加をはかると云ふ計畫を立てゝゐる。又外に出ゝは、貧民窟の改良事業とか、養育院の設立とか、公娼私娼の撲滅運動とか、世界平和の爲にする軍備全廢とか、關税廢止とか、度量衡貨幣の均一とか、世界語統一とか、東西文明の調和とか、尙進んで世界大共和國を設立せんとする計畫とか、或は又衛生上の大問題なる禁酒禁煙の運動とか、資本と勞働の問題とか、勞銀と勞働時間の問題とか、貧民や白痴の教育問題とか、乃至は牛馬の待遇問題に至るまで、ありとあらゆる社會改良の問題に手を衝き込むは即ち宗教家の本務であつて、イエスの稱へし神の王國とは實に此世に於ける理想社會を意味するに外ならぬ。然り吾等宗教家は理想の社會の建設に全力を注がねばならぬと力み、宗教の領域は全然社會關係以上に一歩も出でざるものの如く思惟する者が世には少くないやうである。

殊に米國に於て左樣である。されど若し宗教が只それだけであつたならば、それは社會學である、社會運動である。宗教と稱して獨立の存在を保持する必要はないのである。

由來社會とか文明とか云ふものは人間の人格を養成する手段であつて、社會又は文明それ自身が人生の目的ではない。イエスの言葉に『全世界を得るとも汝の靈(人格)を失はゞ何かあらん』と、誠に意味深き言葉である。人間が社會的團結協力により自然力に打勝つて進み行く世の文明は、人類が全世界を我が物にする過程であつて、頗る善き事なるは勿論であるが、人間の打勝つべきものは獨り自然界だけではない。自己自らが自然の子として、幾十年かの生涯の後には、如何にしても朽ち果つべき肉體に囚はれてゐる。されば死に打勝つて限りなき靈的生命に入ることは、一層大なる人生の努力であらねばならぬ。又吾等

は小さき自我の欲求に囚はれて甚だ狹い、ちつぽけな生涯に安んぜんとする動物的本能にからまれてゐる。此世の文明、地上の文華、即ち物質文明に眩惑して眼に見えぬ靈的世界の大事を打忘れ、自己の心靈が如何に偉大なる發展の可能を持つてゐるかを究めずして、羊の群れの如く、只團體の勢力に依賴して生活せんとする傾向を持つてゐる。然るに此の狹き短き蜉蝣の如き生涯を超越して、無限大なる、宇宙大なる人生を味はんとする。これ宗教の本領ではないか。

現代は人間の威力の最も高調されたる時代で、現世が活動の檜舞臺である。出來得るだけ花々しく外的に活動して此世の生を終る、これ人生の極致であると考ふるやうになつて來た。未來のことなどはどうでもよいと云ふ現世主義が多數の精神を支配せんとしてゐる。然るに見よ、仰ぎ見る無數の天體は幾億なるを知らず、吾等の住める地球は無限大なる宇宙の光線中に漂ふ一塵埃に過ぎ

ぬ。吾等の生命假令ひ百年を閲みするも、無窮の時間の前には一瞬間ほどにも値ひしない。人文の發達と共に、新知識の發見と共に、宇宙の謎が歩一歩解決に近づきつゝあるやうだが、宇宙の神祕は水に映りし月影の如く、吾等の知識が歩一歩を進むれば進めるほど、神祕の月影は我等より遠かつて往くのである。されば吾等をして不完不備の現在社會にゐて、圓滿充足の靈的生活を營み、眞善美の理想なる愛の神と父子的密接の關係に立ちて、神人合一の靈交に憧かれ、且つゝを實現させる、これ宗教の職分ではないか。一言にして盡せば、神と人との靈的結合即ち神人の社會的關係を整へることが宗教の本分である。

然らば宗教は人間の社會と何等の關係なきものなりやと云ふに、決してさうではない。大に有之り。大にあるが併しそは直接の關係ではない。宗教の本諦なる神人の靈交を離れては何等の意義なき關係である。先づ第一に宗教は人生

の意味を深め、世世の社會に屈竟の理想を與ふ。若し社會に宗教がなかつたならば、人間と人間との關係は冷酷なる正義の觀念を以て律せられるであらう。假令ば茲に一個のパンがある。二人の人が之を要求してゐると云ふ時に、之を折半するは數量的公正(ヂヤスチス)の觀念から出たもので、宗教を離れた法律政治は皆權利義務的關係以上に出づることは出來ぬ。若しそが公正の觀念を以てするのではなく、其パンは當然一人に屬するものであるが、他の一人を憐んで可愛想だから乞食に物を與へるやうに、惠んでやると云ふ考から折半するのであつたならば、そは道德的であるかも知れぬが、未だ宗教的と云ふことは出來ぬ。人を憐むとは高慢である、惠むとは貴族的である、さらば眞に道德的とも云ふことは出來ぬ。然るに神と人との父子的の愛を根柢とせる宗教は、世界一家族の理想を掲げて、政治も法律も凡ての社會問題をも愛の原理に基いて解釋するのであ

るから、一個のパンを二人に二分するは愛の結果である。靈と靈との抱合より生ずる自然の結果である。其處に會心の温味がある、其處に倶樂の快味がある、其處に美的本懷の情味がある。宗教の社會的使命は卽ち凡ての社會活動をば愛の原理を以て靈化することである。茫漠たる或は慘憺たる社會を家族化することである。家族は平等的で、民本的である、非律法的である、非政治的である。そは只愛の關係によりてのみ成立つてゐる。所詮國家も世界も皆家族化さるべきである。

由來宗教は社會的に發達したものであるが、其根本要素は個人的である。處で社會改良の事業に於ても宗教は先づ個人の靈的革新から始めねばならぬ。先年米國イリノイ州の副知事オハラ氏が、シカゴ市に於ける娼婦退治の擧を企て、彼等が娼婦に墮落する原因を女店員の薄給に歸し、『一週間五弗を以て靈と肉と

を安全に繫合せて置くことは不可能である』、彼等の給料さへ相當に增加してやれば墮落の機會を除去することが出來るから、法律上雇主に增給を强ふべしとて、女店員の增俸問題を遊說したことがあつた。そは誠に一見識である。併し增俸の結果により衣食住の道が容易になつたからとて、娼婦に墮落する機會が少くなり、遂に私娼其跡を絕つべしと云ひ得るであらうか。若し社會道德の問題が爾かく物質的のものであつたならば、理想社會の實現は政治家や經濟學者に委せて置いて澤山である。されど思へ、女店員の墮落の動機は決して物質的の不自由からではない、精神的の缺陷が眞の動機である。靈的の慰藉奬勵交情に空虛を生じて肉的の墮落に趨る。彼等は精神的の良友に缺乏して肉的の惡友を作り、遂に奈落の底に沈むのである。

宗教の職分は靈的生活の向上發展である、個々心靈の救濟である。彼女を神

に導いて人生の意義を知らしめ、生命の奥底より湧き出づる靈的の滿足を感せしめて、初めて眞に彼女の墮落の機會を遮斷することが出來るのである。社會改良の實行も實は宗教的に個人々々の內的生活より始めねばならぬ。イエスの云つたやうに、神の王國は此處にあり彼處にありと云ふが如きものではなく、個々の心靈の內に存する王國である。そは精神的自由と信仰と愛の王國である。吾等は此種の王國の建設に全力を注いで奮鬪せねばならぬ。

愛の創造力

古來クリスト敎に於て、神が宇宙を創造された理由は其限りなき愛の力に由ると云ひ傳へられてゐる。神は恰も藝術家の如く、我が愛を客觀化、物象化せんが爲に、宇宙なる大藝術品を創作し、己が愛の御姿を如實に描寫して其榮光を讃美し給ふたのであると。そは詩的表言として甚だ美しくある。されど吾等今日の科學的知識に育ちし者は、宇宙以外に超然たる創造の神を認めることは出來ぬ。宇宙がフヒディアスの塑像の如き藝術品であるならば、其創作家なる神は宇宙以外に超然たるものであらねばならぬが、宇宙は宇宙以外の力によりて創成されしものと思ふことは出來ぬ。宇宙は其內在的の創造力(クリエティヴパワア)に由り、自から自からを創造し、無限に進化し往くものである。而して其創造的進化の原動力は

何なるべき？　十九世紀の思想界を風靡せし大哲ヘエゲルはそを理性の力に歸し、ショペンハワアは生きんとする意志に歸し、ニイチエは力を得んとする意志だと叫び、近くオイケンは之を宇宙的神的生活に歸し、ベヤグソンはそを生の躍動（ヴヒタル）だと云つてゐる。

ベヤグソンの想像せる如く、宇宙は始めより生命ある流動なりしか、或は生命なき流動より漸次生命に進化せるものなるか、俄に判斷することは出來ぬ。宇宙の創造的進化が事實だとするならば、そは必ずしも始めから生命あるものと見る必要はない。由來進化する宇宙に始めありと想像するのが間違である。始なく終りなく只成長あるのみで、若し成長進化は即ち生命なりと云ひ得べくば、宇宙は全體として始めから生命あるものと見なければならぬ。されど宇宙を渾一として汎神的に見るヘエゲルや、ベヤグソンの假定に逆つて、民本的多元

論の宇宙觀を把持せるゼエムス一派の實際主義（プラグマチズム）によると、宇宙の渾一觀は人間生活の願望が作り出したもので、事實宇宙は總全的に始めから統一ある活動を續けつゝあるものではなく、無限に雜多な異分子が相折衝して、徐々調和統一を創造しつゝ進化し往くものであるかも知れぬと。

そは兎に角、之を科學的の實驗に聞くに、彼等の稱ふる元素は常に異質のもの二つ以上相抱合して存在すると。二水素と一酸素と化合して水の一分子を作る。そは兩者相合して成るものではなく、普通水の分子として自然に抱合して存在するものを人工的に分解して二元素を作り得るに外ならぬ。宇宙の萬物は一として二つ以上の異成分の抱合にあらずして存在することなく、純元素が孤立して自然に存在することあるは只例外の事例に過ぎぬと化學者は主張してゐる。されば古代より此抱合の力を親和力と稱して、そが神秘の力を稱（たゝ）へ、エム

ペドクレスの如きは宇宙の根元をば愛の力に歸したのである。近くはドイツのヘッケルの如き、此化學的親和力を以て高尚なる生命の原動力なる愛の關係を説明せんとしてゐる。が、そは全く解釋の方法を誤れるもので、愛の力よく親和力の如何なるものなるかを彷彿し得んも、親和力の如き單純なる現象を以て複雜幽玄なる人間の愛を説明することは到底不可能である。

或る人曰く、事物を説明せんと欲せば、其根原(ルウト)によりてせず、其成果(フルウト)によりてせよと。此複雜なる今日の宇宙は能く過去の單純なる宇宙を説明し得んも、過去の宇宙は今日の宇宙を説明することは出來ぬ。吾等は草履取りの木下藤吉が豪かつたことを云爲するが、そは羽柴筑前守や豐臣秀吉が豪いからで、彼れ若し豐臣秀吉たることが出來なかつたならば、同じ秀吉の青年時代は然かく豪いものだつたとは誰しも思ふことが出來ないであらう。これ大成せる英雄秀吉

が素寒貧な藤吉を説明してゐるからである。然り、木下藤吉は豐臣秀吉を以て説明することは出來るが、豐臣秀吉は木下藤吉を以て解釋することは出來ぬ。されば、ヘッケル等のなせる如く、人間の靈妙な愛を説明するに單純な化學的親和力を以てするは、説明の方法を過てるもので、吾等は寧ろ人間的愛の關係を以てこそ能く化學的現象を解釋し得べしと信ずるものである。

然り、愛よ、そは宇宙進化の原動力であつて、愛の發展に從ひ宇宙は益々靈妙な働きを示す。始めなく終りなく無限より無限に進化し往く宇宙は、吾等の知り能ふ最も單純なる創造過程に於て、既に愛の力を發揮してゐる。愛の結合力は星雲を凝集して日月星辰を作り、一層固く凝結して地球となり、茲に物質の化合による一形體を成した。これが重力の作用によりて太陽の周圍を廻り、太陽亦他の大なる恒星の周圍を繞ると云はれてゐるが、此重力、引力の關係も

それ一種の愛の力ではないか。愛は互に結合し融合せんとする相思の力である。引力の働き何ぞこれに似たらずや。斯くして成りし地球に自動的個々の生命が發生したのは、引力や親和力が一層進化したからで、單細胞動物なるパラミシウムの如き允微な小虫が、老いて單純な分身蕃殖をなし得ざるに至る時、他の一虫と抱合して二者一虫と化し、茲に再び若か返りて盛に分身生殖を行ふと云ふが、斯る單純な顯微鏡的原生動物に於ても、愛の現象は著しく進化し、到底單なる引力や親和力を以て説明することは出來ない。

進んで關節動物や甲殼動物になると兩性の區別が明に認められ、兩性の相愛は生命存續の必要條件となり、個性の發展は一層同族同棲の必要を感せしめ、孤獨を欲するものは遂に生存競爭の敗北者たらざるを得ないことゝなり、蜂や蟻の如きは會族結集して秩序整然たる社會生活をなし、愛の妙用一層大なるも

のあるを示してゐるのである。高等動物の生命の運行が蜂蟻のそれにも優して一層愛の力に依賴せるは云ふまでもないことで、愛ある所萬物は榮へ、愛衰へて萬骨枯る。枯れなんとする一鉢の朝顏、持主は之に一杯の水を注いで其生命を恢復する。これ愛あるが爲である。徒に鴟梟の慾を逞ふして戰亂相踵き、百萬の死屍現に歐洲の原野を掩ふてゐるではないか。これ愛なきが故である。愛は他と共に生きんとする個性發展の必要條件であつて、自我の觀念が强くなればなるほど、他と融和協同して生活せんとする愛の力が强くならなければ、生命は、其創造的發展の力を恣にすることは出來ぬのである。されば愛の力は生命の一層複雜なる深刻なる靈妙なる發展を可能ならしめる創造力であつて、生命の流動に若し愛の力が加はらなかつたならば、弱肉强食の生存競爭は一層激甚を極め、個性は孤立して遂に個我の眞意義を失ふに至るであらう。

人は愛にあつて夫婦を成し、家族を成し、國家を成し、社會を成す。これ個我を押擴げて他と融合し、空間的には之を全人類より全宇宙の森羅萬象に及ぼし、時間的には過去歴史上の人物と靈的交歡の力に繫がり、未來永遠の人類社會及宇宙の運命を思ふて、日夜宇宙人生の創造的發展に貢献せんと努力する人は、實に最も大なる愛の力を發揮せる者だ。斯る偉大なる愛の力を以て遂に萬有に磅礴たる精神力、即ち宇宙の大靈と融合し、人類の福祉と向上を促進し、宇宙の創造的進化に參與するのが人生の意義である、目的である。

されば愛は物體の引力、物質化合の親和力より、人間と宇宙との靈的融合に至るまで、物心兩界を通じて生命運行の原動力であつて、同時に生命進化の內的目標（マヰンドエーム）である。愛の惡用は自我心となり、愛の濫用は屢々戀に墮する。共に無限大に發展すべき愛の力を私して只個我の愛に蹉跎し、或は只一二の他を愛す

るに止めて却て自餘大多數の人を憎み又は傷く。世に罪惡あるはこれが爲である。よし積極的に毀害を加へて進化の行程を阻害せざるまでも、進化すべものの進化せざるは無愛である、罪である。人は宇宙創造の原動力なる愛の行爲の清き發展、そは誠に凡ての物象を抱擁し攝取する其創造的發展を圖らんとして而して自からの人格を向上させる。偉大なる人格とは只それ清き愛の深き博き發展の爲に努力する人物と云ふ義に外ならぬ。愛は常に珍らしく常に新らしきものを創造してそれ自からの糧（かて）となす。我れ今國を愛して茲に止まらば、所詮愛の饑渴を促がすもの、愛は無限の生長を欲する。そは不絕其抱擁力を深め且つ廣めて新らしき生活に入る。これ其靈妙なる所以であつて、ダンテのベアツリチエに對する愛は彼が「神曲」の雄篇となり、ルウタアの一尼僧に對する愛は醇化して宗教改革の火の手を擧げしめ、コルンバスが地球渾圓說に對する眞

理の愛は西半球の發見となり、リンコオンが國家の愛、人道の愛は以て奴隷解放の大事業を完成させた。吾等が常に高き美はしき生命の創造に向つて努力精進するは、それ愛あるが故である。

宗教と人生

"I came that they may have life and have it more abundantly."—John 10:10

一　生の要求と文明の進步

人間の頭蓋の大さは略ぼ相似たもので、頭蓋骨の容積大なるの故を以て必ずしも智者賢者なりと速斷することは出來ない。頭腦の優劣は寧ろ腦漿回轉部の複雜の度によるものぢやさうで、腦力の最も發達した人は腦漿の裂け目(フヒジユア)の最も複雜な人だと云ふことである。單に物質的進化の事實を見るも、量に於て限られたるものは質に於て發展を遂げ、益々精撰醇良を致すが常である。

今飜て人生を一瞥するに、肉體的生命の量に於ては昔も今も餘り變りはない。

武内宿禰が三百年生きてたことは恐らく傳說に過ぎないであらうが、大隈伯の百廿五年が空想でないとするも、又或る人の稱へてゐる人壽二百年說が實現されるにしても、人間の壽命は肉體的に二倍三倍となることは容易の業ではない。吾等の生命は少くとも分量的に越え難き限界を持つてゐるのである。之に反して人間の精神的生命卽ち靈的生活に於ては、昔と今との懸隔は如何に大なるものであるか。穴居時代に洞窟の石壁などに彫り付けた野獸の畫とアラファエルやレンブラントの繪畫と、其懸隔はどうであらう。原始時代の矢根石と現代の殺人機械なる巨砲や超弩級の軍艦や、其他諸般の製造機械、譬へば印刷機や裁縫機や汽船や飛行機の精巧と比較したならばどうであらう。原始時代の曆算の智識と今日の科學哲學に於ける天界地界生物死物の分析的又は綜合的智識、大は蒼穹幾億の恒星が秩序整然として圓又圓を描いて無限の運行を繼續せる樣、小

は顯微鏡的生活細胞中の色素球（クロモミヤ）が神祕的躍動の狀相に至るまで、單に人智の相違を見るも昔と今と其差實に天地霄壤も啻ならぬであらう。一旦天災地變に逢へば蝗の如く斃死せる原始時代の人民が、今や未來永劫の計畫を立てゝ不時の災難に備へ、其經濟活動を家事の整理から國民經濟、世界經濟に及ぼし、今やアジアの東端、アフリカの南部に起る一動亂さへ世界の隅々にまで其波響を傳ふるやうになつた。人間の道德に就て云ふも、戰爭や掠奪を事とせし酋族の低道德は次第に醇化して、愛や同情や正義や純潔や信認や宥恕や謙遜や平和の美德を成し、又次第に世界化して家族的の道義は國家的人類的の道德にまで進步した。

斯の如く人類は過去數千年の歷史に於て、其肉體の生活に於ては著しい進步を遂げなかつたけれど、其精神生活の方面に於ては實に雲泥月鼈の差も啻ならぬほど發展したのである。而も吾等虛心平氣に人生の努力と其發顯を見來れば、

世は唯何者かの運命に支配されて、成るべくしか成らぬ機械のやうにも見え、吾等が打建てつゝある文明の大構造は畢竟それ何者ぞ、唯人生の本能的生活欲が餘儀なく働いて、餘儀なく作り出した副産物(バイプロダクト)ではないかとの疑問も起る。一旦玆に思ひ誤つた人は滔々として墮落の底に沈み、物質主義、拜金主義、刹那主義、獸欲主義、自然主義の前に扑(べん)々と匍匐してゐるのである。

二　精神生活と價値觀

第十八世紀末から十九世紀全班に亘れる物質主義の文明は非常なる勢力であつて、人間の生命も宇宙の生氣も皆々科學的分析の刄(ナイフ)を以てずた〳〵に切りさいなんだ。而して『幽靈の正體見たり枯尾花』と、衝き止め得た終局の事實は何んであつたか。或はアトムと云ひコオパッスルと云ひ、或は物質と云ひ物力

と呼ぶ。皆夫れ生命なき死物の結合が人生の活動を偶然に、或は機械的に形成してゐるのだと。誠にお目出度い話である。唯物的科學の冷酷な眼には唯人生の功利的價値しか映らない。そは唯生物として此世に在るが故に、出來得るだけ物欲の滿足を求むるが此世の極樂だ。『世の中は何のへちまと思へども、ぶらりとしては暮されもせず』と古人が謠つたやうに、まあ此六尺の身五十年の生涯、厄介物だが持つた以上は滿更棄てたものでもないから、唯糊口を繫ぐだけの事はしなければなるまい。但し精神だの靈魂だの、神だの佛だの、それは以ての外の徒らごと、花よりも團子だ。寢惚の夢想ぢやお腹(なか)は太らないと、有耶無耶の生活を續けてゐる人が世には甚だ多いのである。

併し斯る唯物主義の人々が果して唯物的にのみ生活してゐるかと云ふと、實際は決してさうでない。そは唯表面だけのことである。否な彼等は思ふ存分精

神的の滿足が得られないから、狡猾にも、或は無意識的に、唯物主義を振り廻はして遁れ口上を使つてゐるに過ぎない。見よ、彼等がよし巨萬の財寶を積んで、遊惰放逸、山海の珍味を飽食するも、而も水呑百姓が疲れ切つた手足を差し延べて、夕顏棚の下蔭に麥飯と澤庵に舌鼓打つほどの美味を樂しむことは出來ないではないか。雞肉の御馳走と澤庵の粗菜と、其物質的價値は多大の差であらうが、之を味ふ人々の心的態度によりて其精神價値を轉倒し、前者は美食して其美を味ふ能はず、後者は粗食して尙ほ有り餘る生の悅びに滿たされてゐる。これをしも彼等は尙唯物論的に解釋し能ふとなすのであるか。

吾今贈物として一圓の菓子折を甲者から貰つて、實に有難いと思つた。同時に乙者からも同樣の菓子折を頂戴したが、一向難有味がなかつた。何故だらう。唯物論的に解釋すれば、同樣の原因は同樣の結果を生ずるが當然であるのに、

事實何故に相反する結果を來したのであらうか。そは贈與物の價値は物それ自身に在らずして、贈與者の心的態度にあるからだ。卽ち前者に難有味を感ぜしは、そが贈與者の愛の表現だと思はれたからで、後者に對して然らざりしは、それを一種の賄賂だと蔑視したからである。同じく愛の象徵と見る場合に於いても、自分が或る贈與を受けし時、先方に對する愛敬の念が强ければ强いほど、より多く難有味を感ずるのである。我が最愛の人より受けし品物は鑑一枚の價だになきものでも、無限に難有味が感ぜられるではないか。

以上唯卑近な事例を示すに過ぎないが、感じ來れば一事一物として物それ自身の價値によつて評價されるものはなく、吾等人間が事物に與ふる解釋（インタアプレテエション）の如何によつて、物の眞價は定まるのである。而してそれは精神的のものであつて、物質的のものではない。されば人生に價値ありと見て樂觀するも、何んだ

か分からないとして有耶無耶の生活を送るも、又價値なしとして之を悲觀するも、其處に客觀的標準の存するものありて人生を評價するのではなく、そは只吾等が精神生活の態度如何によりて定まるのである。人生を一種の賄賂と見、或は偶然の空事と見る者は、或は之を憤慨し、或は之を茶化して、世を渡るであらう。然るに之を宇宙の大靈の愛の表現と見る者は、人生を以て此上なき恩惠と思ひ神聖と念ひ、其價値無限に宏大なるを感せぬ譯には往くまい。前者は世俗の無宗教的人生觀であつて、後者は即ち宗教的な人生の積極觀である。宜なる哉、宗教哲學の泰斗ヘフデイングは宗教の本質をば『最高價値の保存、"Conservation of the highest value"』なりと云ひしことや。敗殘の餘喘を鼓舞して『人の生くるは價値の爲めなり』と絶叫せし高山樗牛は、其時初めて彼が宗教的生活の第一歩を踏み出したのであつた。

三　大生命の欲求と内的生活の充實

物質觀は知的にして消極的に生の元氣を沮喪し、價値觀は情的、然り、靈的にして人生の深味に其根柢を有し、止み難き生の欲求は種々雜多の形を採りて表現し、積極的に進取的に一層宏大なる一層深甚なる生の價値を産み出さんと努力するのである。極端に宇宙を悲觀して人生を咀ひしショウペンハワアも『生きんとする意志 "Will to live"』に宇宙の根柢を認めぬ譯には往かなかつた。道德を呪ひ文明を嘲り、遂に自殺して人生の劣敗者の仲間入をした狂的天才ニイチエも『力を得んとする意志 "Will to power"』を彼れの信條とせぬ譯には往かなかつた。ヨハネ傳の著者がイエスの口を藉りて『我が來れるは彼等をして生命を得させ、一層之を豐富ならしめんか爲めなり』と云ひしも、畢竟人

生の根本要求は人生其者の一層緊張したる、一層深甚なる、一層宏大なる發展にあることを意味するに外ならぬ。

グリシャの哲學者が嘗て『人は萬物の尺度なり "Man is the measure of all thinge." と叫んだ。當時は詭辨派の奇言として斥けられしも、今や發達した人間の知識と經驗とは人生其者を以て人生の目的だと呼ばしめるやうになつて來た。"The end of man is man." 人は人生の方寸を以て宇宙の大を度りつゝある。人生以外に人生の目的はないのだ。現代人の所謂生の要求とか、自己表現とか、自己實現とか、內的生活の充實とか云ふ言葉が、如何に頻繁に靑年の腦裡に往來しつゝあることよ。彼等の所謂强き詐りなき生活とか、深刻な切實な徹底した生活とか、まともに眞劍に生の鬪ひを戰ひたいとか云ふ希望や憧憬は何を意味してゐるのであるか。淺薄な肉慾的の生涯に躓いてゐても猶ほ生の

徹底した意義を味ひつゝありと自から誣いてゐる者が多く、刹那〳〵に自己の立場を否定して、節操なく主義なく理想なく抱負なき輩が、晨に甘き酒池肉林の夢に醉ひ、夕べに人生を悲觀して、朝三暮四、漂々浪々、外界の刺激に、又肉的の衝動に、浮萍の如く動搖し、ちつぽけな薄つぺらな感衝的生活に拘泥して、尙奥行のある人生を味つてゐると威張つて見る、其憐れさ情なさ、誠に氣の毒の至りに堪へないのである。

最も大なる自己表現、徹底した自我の實現、深甚なる內的生活の充實、そは誠に人生の拒絕し難き實要求であらう。されど只管に自己を表現し、自我を充實せんとて『過去』なる遺產を其儘背負ひ込んで、野獸同樣在りの儘の生活に徹底の意義を求めんとするは人生の極致ではない。既に無意識的に人は只過去に生きず現在に滿足せず、常に未來に生んと努力してゐる。これ文明に進步あり

し所以だ。切言すれば、人は現實の爲に生きず、常に理想の爲に生きてゐる。否な、少くとも理想の爲めに生くべきだ。もし吾等の生活から日常の希望や憧憬や理想や抱負を取り去つたならば、生命(ライフ)の味が何處にある。そは氣の抜けた酒、鹹みなき鹽、生きた骸骨であらう。吾等は吾等の過去に就いて思ひ廻らす時、吾等の祖先が猿であるかアミイバであるか、又吾等の組成分が物質であるか靈であるか、そんな事實を突止めることは到底出來ない。また突止めなくてもさほど不足を感じないのであるが、吾等が日々の生活から過去の經驗が打建てた正義や仁愛や平和や謙遜や純潔や貞操の如き理想や憧憬を取り去つたならば、人生の運行はどうなるであらうか。迚も眞面目な生活を繼續することは出來ないのである。されば自我實現と云ふも、内的生活の充實と云ふも、畢竟するに最も高尚なる最も豐富なる、最も清き美はしき、愛や正義の理想の充實し

た生活を實現しようと努力するに外ならぬ。然らば如何にして人生は此意味に於て一層大たる生命を味ふことが出來るのであるか、今少しく之を考へて見たいのである。

四　生の欲求の多方面

社會學者スモオル博士は人間の根本的欲望を大別して六の範疇に區劃してゐる。曰く、健康欲、財産欲、知識欲、社交欲、藝術欲、宗教欲卽ち是れである。而して最初の二者は主として肉體的、物質的であるが、殘りの凡てはそれと。精神的、靈的の欲求である。人が六尺の身、七十年の生涯を安樂(カムフオテブル)にするに健康を欲するは勿論で、健康の爲め、又家計の爲めに必要なる財産欲、經濟欲の存するは決して不當の要求ではない。但し如何に安全に健康を保持し、如何に

多く財産を蓄積しても、必しも内的生活の充實を來たすものでないことは何人も疑はない處であらう。内面生活の充實は夫れ靈的精神的のものなるが故である。

今人間の靈的作用を大觀するに、大凡そ三個の方面(アスペクト)に區分することが出來る。知的方面、情的方面、意的方面卽ちこれである。スモオル博士の所謂知識欲、藝術欲、社交欲(道德欲を含む)は疑ひもなく此三方面を代表したものである。今聊か分解的に此三方面に就いて考へるに、先づ人間には知識的に凡ての事物を知り、智慧才覺を增さんとする欲望がある。無智は苦痛である、不安である。と同時に吾等は事物の眞相を確めて、其主人公(マスター)になりたいと云ふ希望を絶えて失はぬ。吾等は知的に精神の限なき自由解放を願ひ、空間的には、座してニウヨオクやロンドンの出來事を知り、大は星辰の運行より、小は生活細胞の微妙な

組織に至るまで、細大洩さず事物の屈竟相を穿ち、又時間的には、千古の事蹟を訪ね、萬載の未來を描いて自在に想像の翼を張る。主知主義の哲人ヘエゲルが云つたやうに、一物を知るは既に其物の上に超越することである。『吾人は須らく現代を超越せざるべからず』と叫んだ樗牛の言に隨喜する青年諸君は、先づ現代を達觀せよ。而して達觀しなければ超越し得ないことを覺らねばならぬ。吾等が小學校で『いろは』のいの字をどつちに曲げてよいかを知らなかつた時代と、成長の後天體の運行を眺め、或は自然の法則を編み出して、幾百年後の現象を豫見し或は想像し得るやうになつた知識の光と、其活躍の自在に於て、實に幾何の相違であるか。斯くて吾等は自然や社會に關する諸科學を打建て、科學の科學として宇宙人生一切の現象を知的に遺憾なく解釋(インタアプレット)し評價(エヴァルエート)して、其徹底した意味を見出さんとする哲學を創造したのである。

今情的方面に於ける生の發展を一瞥するに、吾等が感受し、又は抱懷する美の感想は常に一定の形を取つて表現せんとし、或は外界の自然物中に內界の美的感想を讀み込んで、之に恒久の形を與へ、或は外界の自然を內界の靈動に攝取して、之に人格的の意味を添へ、或は現實を理想化し、或は理想を現實化して、建築、彫刻、繪畫、音樂、詩歌文學の藝術は生れた。皆それ一個人が各自異りたる種々の經驗に他の個人をして靈の共鳴を感じさせるやうな形體を與へて、之を客觀化し恒久化せんとする憧憬と努力の發顯である。見よ、藝術の創造によりて人生は如何に自在の翼を延ばし得しかを。そが瞬間の感想や經驗であつても、靈の高潮に達した、如何にも捨て難い趣きのあるものは、凡てそれ藝術の力によりて永久に人類の重寶として保存し、天下幾万年の後生をして如實に生の美妙を味はしむる自由の獲得は實に藝術の誇りとする所である。生

の豐富と甘味とは藝術の創造力によりて如何に增進されてゐるか分らぬ。マシュウ アーノルドの所謂『妙味と光耀(Swe.tness and light.)』は誠に藝術と哲の二方面に互りて人生の實要求を穿ち得たものである。

更に進んで意的方面を見るに、家族制度、國家制度、社會制度の發展により、法律、政治、道德の進步により、どれだけ自由意志の行使が確保されつゝあることよ。人或は曰はん、法律や道義は群衆の立てたる客觀的標準によりて、個人の自由意志を束縛するものなりと。然り、ニイチエの如き狂人の一面觀によれば慥に左樣である。而も見よ、殆んど何の法律もなく道德律も行はれないホッテントット人やブッシュマンの間に眞の自由が確保されてゐるや否やを。何等の檢束なき社會には何等の自由も行はれない。これは逆說的な眞理で、社會の秩序整然として却て眞の自由は保障されるのである。少數者の意志のみ縱に行使さ

れる社會に於ては、民衆は只外來の權力に服從するのみで、內律的(autonomous)任意的(spontaneous)の行動を取ることは出來ない。社會の進歩に從つて外律的(heteronomous)な道德は漸次內律的となり、是まで外界の權威、例へば酋長や國王や國憲や道德律の威力に服從して、己が意志の如何を問ふ暇なかりし個人は、今や益々自律的に己が衷心の要求によりて是認した行爲を決行し、人類が過去數千年の經驗によりて打建てたる道義の理想標準を、當面の社會事情に照らし、自己の經驗に攝取して己が生命の一部となし、自發的に任意的に道義の生活を營むやうになつた。これ亦大なる靈的自由の進步發展である。

五　內的生活の分裂

以上述べ來りし心的生活の三方面を綜括するに、知的方面は科學や哲學を創造して眞理の追求に餘念なく、情的方面は藝術や文學を創造して美の極致に憧れ、意的方面は法制や道德を創造して善の限りなき增進に屈竟地を見出さんとしてゐる。而も此三方面はそれ〳〵其要求を異にするだけ、それだけ往々相衝突矛盾を免かれないのである。知的に眞なるもの必ずしも情的に美なることは出來ない。美的情緒の浮動する所、時に荒唐無稽の幻覺や非眞理中に却て生の悅樂を感ずることがある。又道義心の冷酷な判斷が熱烈な美の憧れを容赦なく蹂躪し去り、或は奔放せる美的欲求の向ふ所乍ち善惡の彼岸に突進して社會の秩序を紊り、個我自身の生命をさへ蕩盡すること甚だ少くはない。又道德的な實際生活に安住の地を見出してゐても、知的の懷疑や不滿足が忽ちにして心の平和を搔き亂すことがあり、或は知的に悟り顏なる哲學者が實際生活に於て着々破綻を招き、言行矛盾撞着の生涯に泣いてる者が澤山ある。然らば此三方面

は常に吾等の心的生活を分裂させ、互に衝突し互に撞着して、遂に一致調和することは出來ないものであらうか。

人生には矛盾が多い、然り甚だ多い。昨日是とせし處今日之を否定し、今日之を否定して翌日更に之を是認す。甚だしきに至りては瞬間的に刹那的に甲から乙へ、乙から丙へと移り往く吾が人生の經驗を反省しては、如何で其前後撞着せる矛盾多き生活を呪はない者があらう？　これ畢竟心的生活の一方面のみ時に著しく過重され、直に其反動として他方面を又著しく重視することがあるからで、此三者を統一した調和した生活こそ、最も能く内的生命の充實を企る至上の方便であるが、扨て吾等は如何にして、又奈邊に之を求むることが出來るのであるか。甚だ迷はざるを得ない。

吾等の最も恐れるものは内界の分裂である。眞と善と美とを各別に求めんと

する内的生活の騒擾紊亂である。而して之を統一するは何者の力であるか。我等若し知的方面にばかり生くることが出來たならば、切なる情的欲求の苦難を免かれて、科學や哲學の恬淡冷靜な處に安住の地を見出すことが出來るであらう。然るに理智の與ふる生命は光に滿てるも、冷酷にして温味がない。由來知能(理性)は調節的(レギュラティヴ)のもので、創造的(クリエティヴ)ではない。そは蒸汽機關のピストンの如く、此知能なるピストンを動かす原動力なる情熱がなければ、生命の車は動かない。理性に傾倒せる生命は所詮乾燥無味の一機械に過ぎないであらう。そは到底生氣潑剌たる人間の堪へ得る處ではない。然らば情的生活に奔放して藝術を生命とし、其處に生命の充足が得られるかと云へば、それも亦覺束なし。ランスロットとゲネヴィアの戀、パオロとフランチェスカの戀、其美は即ち吾等の肉をそゝり情を燃やさせるに足る魔力を有するであらう。されど人類の道德的理想

が打付けた邪淫の刻印は免かれ難き苦痛と煩悶を當事者に與へ、悲戀悲歌の嘆きを擧げしめずんば止まないのである。又實際生活の整頓を過重し、道義の要求にのみ傾聽し居る人は却て生命の内容を貧弱ならしめ、趣味を缺き風致に乏しく、徒に人間的地上の問題に跼蹐し、齷齪し、想像の翼を藉りて神祕の境域に逍遙する能はず、又優美典雅の趣きを缺き『血に燃ゆる此柔肌に觸れも見で、寂しからずや道を説く君』と皮肉られても、敢て是に打勝つだけの詩情を湛へ、自然主義者をして顏色なからしめるだけの勇氣もない、主張もない。憐むべき哉。

斯く心的生活の只一方面に偏した生涯は苦痛であり、且つ淺薄であるのみならず、到底不可能である、自殺的である。情に強き人は理にも強き人だと昔から知られてゐるが、理性の發達した人には同時に涙脆ろき人多く、而して理性と情性、義理と人情、知識と實行、理想と現實、自由と運命、敎養(カルチュア)と境遇(サアカムスタンス)

との間に於ける爭鬪は一層激しくなり、矛盾撞着、混亂騷擾を極めて内心の分裂(シヤム)は一層甚しく、人生の悲劇は凡て之れより生ずるのである。然らば如何にして知情意の三方面を統一した生活、又各方面の追求する眞や美や善の調和した滿足が得られるのであるか。換言すれば、吾等は如何にして眞善美の極致なる最高の理想を描き、之に憧れ、之を念じ、そを個々の生涯に實現せんと努力することが出來るのであらうか。そは哲學のみの賜ではない、藝術のみの領域でもない、又道德のみによりても之を贏ち得ることは出來ぬ。所詮そは是等三者に超越し、彼等を統合して渾一の實在となれる宗敎の力でなければ不可能である。内的生命の統一は實に宗敎の本領である、職分である。

六　生の統一者としての宗敎

スモオル博士に限らず、從來宗教を以て道德や藝術や哲學と同格同地位のものと見做し、或は之を知識の問題となし、或は情操の範疇に入れ、或は道義の一變形と見しが如きは甚しき謬見で、宗教は此三方面の孰れにも偏屬するものではない。そは此三方面を網羅盡して、各方面の分業的機能を明かにし、全人的調和統一を與ふるのが卽ち宗教の本分である。されば宗教は他の三者を基礎として立ち、彼等を奴僕として使役する全生命の支配者である。

今之を短的に表示すれば卽ち左の如くである。

人生―（知＝科學、哲學（眞）＝智慧／情＝藝術、文學（美）＝情操／意＝法政、道德（善）＝正義）―宗教（愛）

然り、宗教は哲學、藝術、道德の三者に超越して、是等の三者を統率する全

生命其者の創造であるから、往古より宗教には知的方面を缺如せしことなく、宇宙人生に關する哲學的、形而上學的要素、卽ち神觀、世界觀、人生觀を有し、神又は宇宙の大靈と人間との關係を明かにして、人生の行路を示し理想を描く。神學の優劣は直に以て個々宗教の價値に關する問題となつてゐるほどである。又宗教には藝術方面、卽ち宇宙の大靈の人格的表現、藝術的儀式、詩歌的音樂的讃美を欲きしことなく、內なる靈のあえぎ往く宇宙の大靈は有形無形の神祕的シムボル（象徵）として常に表象されてゐる。宗教から其情的憧憬なる希望や信仰を外にして、何處に宗教の使命を認むることが出來よう。又宗教には常に道德的實行の方面を缺ぐことなく、更に進んで宇宙の大靈と社會的關係に入る、所謂靈交（コムミユニオン）の神祕的要素を缺くことは出來ない。如何に高尙な神學、如何に藝術的なシムボルを有する宗教も、信者の道義的生活に清淨醇美なるものなくば、宗

教の價値は蓋しゼロである。

されば宗教の組成分として常に哲學的、道義的要素を必要とし、若し其一を欠く時は宗教の存立を危くするほどであるから、宗教の綜合的職分は最早疑はれる餘地はない。そは是等の要素を基礎として成立せるものなるが故に、吾等が內的生活の最も豐富なる高尙なる强き淸き美しき充實と表現とは、宗教を措いて他に求むることは出來ないことを自から證明するのである。

個我の充實は單に個我の主觀に籠居して之を求むることは出來ぬ。タゴアが云へる如く、燭若し滿々の油を湛へて自我の充實を誇るも何かあらん。一旦之に火を點じて熱火熖々の內に自我を忘れ、他我一切を遍照する處にランプのランプたる意味を盡すのであると。個我の充實は情熱に燃え、理智の光に照し、意志の自由を發揮して、他我一切を愛と同情の中に抱擁し、攝取し、小なる自

我は愛の翼を擴げて先づ家族と融合し、家族大の自我を實現し、國家と融合して國家大の自我となり、全人類を抱擁し盡して全人類大の自我を實現し、遂には時間的にも空間的にも宇宙の萬有一切を自我に攝取して、宇宙の大靈即ち神と融合した神人合一の宇宙的大我を實現する。これ宗教の敎ゆる自我實現、內的生命の充實の楷梯であつて、其實現の方法は吾等が日々の生活に於ける犧牲的聖愛の絕間なき增殖發展あるのみである。

『神は愛なり』と。人生は神の愛の賜としてその恩寵の感じに吾も亦神を愛し人を愛せんと思ふ。これ吾等の宗教的態度である。神の恩惠と見る人生は神聖にして價値普ねく、吾等は愛によりて自己の人格を宇宙の大靈に結び付け、神と共に働き神と俱に樂しみ、宇宙人生の創造的活動に參加する。斯の如くにして個々の人格は其主觀的要素を漸次客觀化し、瞬間的要素に絕えず恒久性を與

へ、あらゆる醜惡汚濁とまともに戰ひ、眞劍に打合つて、彼等を屈服し、鍛練し、醇化し、美化し、善化して彌益理想的善美の世界を建設し往く。斯くて限りなき清き美はしき愛の生活の發展を計り、限りなき理想の向上を希望し、限りなき人格完成の眞義を會得して、一層活潑に一層元氣に緊張した生の努力奮鬪を旺盛ならしめる。そは誠に宗教本來の職分であつて、人生の活要求は凡て夫れ宗教の氣息に靈化されて、初めて宇宙的（コスミックシグニフヒカンス）意義を贏ち得るのである。

宗教と人生 終

大正十三年三月十日印刷
大正十三年三月十三日發行

【定價貳圓四拾錢】

宗教と人生
奥付

不許複製

著者　帆足理一郎
發行者　東京市神田區北神保町二番地　河本哲夫
印刷者　東京市小石川區指ヶ谷町四番地　宮下桃太郎
印刷所　東京市小石川區指ヶ谷町四番地　宮下印刷所

發行所　東京市神田區北神保町二番地　新生堂
振替口座　東京六六二七三番　長野三四四六番

帆足理一郎著作目錄

博文館	文化生活と人間改造	二、四〇	既刊
同	改訂聖き愛の世界へ	二、四〇	同
同	人間苦と人生の價値	二、四〇	同
同	婦人問題評論集	二、四〇	近刊
新生堂	精神生活の基調	二、四〇	既刊
同	改訂哲學概論	三、〇〇	同
同	改訂宗教と人生	二、四〇	近刊
同	社會と人生	二、四〇	同
同	哲學と人生	同	同
同	教育と人生	同	同
同	改訂縮刷教育哲學概論（全譯）	同	同
同	人生詩人ブラウニング	同	同
同	死生と宗教	同	同
同	宗教哲學概論	同	同

早大教授 帆足理一郎新著

社會と人生

□四六判四五〇頁布製函入
□定價二圓四十錢稅十二錢

著者は現實の人間關係を靈化善化美化聖化せんが爲に、『社會奉仕即人格向上』なる著者獨特の生活原理を高調し、社會と個人とは世相の兩極にあらず、一人格の二方面に外ならずと觀、社會の眞價を個人の內面生活に求め、彼れの心理に活躍する社會人の抱擁力と深刻性とは、直に以て個々人格の內容を組成するものと主張し、社會生活に於ける聖き愛の奉仕は即ち個々品性の具體化だと力說してゐる。斯る原理に基いて本書は現實の社會を直視し、國民生活の改造を提唱して來るべき新社會に於ける新人の理想を指導せんとするもの、燃ゆるが如き著者の熱血は送つて讀者の心胸に何等か宗教的欣求を喚起し社會改良家的熱誠を鼓吹せずんば已まないであらう。

帆足理一郎著

縮刷改訂

哲學概論

□四六判五百頁布製函入
□家價金參圓郵税拾六錢

（八版）

專制主義貴族主義のドイツ哲學は破産し、絶對主義論理主義の形而上學は破滅した。今や哲學も實際經驗の鍛冶場に走り、勞働の膏血に洗禮され、民衆文化の琴線に觸れたものでなければならぬ。著者は進化論の立場に立てる創造的人格主義の哲學を稱道し、傳統哲學の迷妄を破つて新哲學の曉鐘を鳴らしつゝある。本書は實に邦語哲學概論中最良のもので、行文流麗、簡單平明、尙哲學の各部門に亘つてあらゆる問題を取扱ひ一々明快なる批判を加へてゐる。本書一たび世に出ずるや、忽ち讀書界に廣まり、版を重ぬること二十餘版、而も其價甚だ廉ならざるを以て弊堂玆に見る處あり、近く其改訂縮刷を發行して定價を安くし良書の普及を圖るつもりである。

早大教授 帆足理一郎新著（第六版）

定價 金貳圓四拾錢
送料 拾貳錢

精神生活の基調

古今未曾有の慄獄的試練に直面して、我國民は何とすべき？ 著者は曰く「國民よ、此災害を機緣として蟄神的に生れ更はれ。物的な利己心を去り、浮薄な虚榮心を棄て、空華な歡樂の夢より醒めて、獨りが眞に一個の人間たらんことを心掛けよ。人格の光輝は地震も海嘯も火焔も疫癘も之を滅盡することはできない」と。又曰く「我國民に再生の力を注ぐものは基督教である。然し著者の信ずるクリスト教は神話的な傳統的なクリスト教でなく、イエスの體驗に依據したトルストイ一派の信仰である。それは參禪的沒我の修養ではなく、奉仕的聖愛の實行生活によつて歩々絶大の自我を建設しゆくことだ。それは社會化卽個性化の原理に立つ人本主義の宗教である」と

目次概項

一、トルストイとガンディの宗教思想　二、生の要求と宗教　三、昔の宗教と今の宗教　四、現代思潮とクリスト教　五、クリスト教の眞髓　六、救樞觀の今昔とクリスト教　七、神々の死　八、宗教の特質　九、人本的宗教　十、祖先崇拜の末路　十、國民道德と宗教　以下

發行所 東京市禁田區北神保町二番地 振替長野三四四六番 新生堂

トマス・アケンピス 原著　中山昌樹 譯

▼四六判四百五十頁天金函入
▼四月下旬出來

改版

信仰叢書 第一編

基督に倣ひて

古今東西に亘りて偉大なる人物の深刻な靈的體驗の記錄は其數少からずと雖も、其中にありて嶄然頭角を顯はし、歳月の進むと共に愈光輝を增し加へゆくは聖アウグステイヌスの懺悔錄と本書とである。此二書は實に世界を通じて信仰修養書の双璧である。トマス、アケンピスは七十年の長日月を修道院の一僧房にありて孤獨と沈默とのうちに送り、密室の祈禱と瞑想とに浸り、徹底的に內面生活を辿つた。その怖ろしき迄に高く且つ深き信仰經驗を記したのが本書である。己が靈魂の核心に透徹することは即ち萬人の心に透徹することである。トマスの白熱的信仰は本書を通じ、凡ての人の心を把握し、此の聖きもの高きもの永遠なるものへと拉し去られば止まぬのである。淺薄皮相の安價なる斷版的生活に惱まざるゝ我等は本書によりて確固たる永久の基礎を得ればならぬ。

▼中山昌樹譯　聖アウグステイヌス　懺悔錄（近刊）

早大教授 帆足理一郎新著（第六版）　定價 金貳圓四拾錢　送料 拾貳錢

精神生活の基調

古今未曾有の煉獄的試練に直面して、我國民は何とすべき？　著者は曰く「國民よ、此災害を機緣として精神的に生れ更はれ。物的な利己心を去り、浮薄な虛榮心を棄て、空華な歡樂の夢より醒めて、獨り獨りが眞に一個の人間たらんことを心掛けよ。人格の光輝は地震も海嘯も火焰も疫癘も之を滅盡することはできない」と。又曰く「我國民に再生の力を注ぐものは基督教である。然し著者の信ずるクリスト教は神話的な傳統的なクリスト教でなく、イエスの體驗に依據したトルストイ一派の信仰である。そは參禪的沒我の修養ではなく、奉仕的聖愛の實行生活によつて歩々絕大の自我を建設しゆくことだ。そは社會化卽個性化の原理に立つ人本主義の宗教である」と

目次概項

一、トルストイとガンディの宗教思想　二、生の要求と宗教　三、昔の宗教と今の宗教　四、現代思潮とクリスト教　五、クリスト教の眞髓　六、救極觀の今昔とクリスト教　七、神々の死　八、宗教の特質　九、人本的宗教　十、祖先崇拜の末路　十、國民道德と宗教　以下

發行所　東京市禁田區北神保町二番地　振替長野三四四六番　新生堂

トマス・アケンピス 原著　中山昌樹譯

▼四六判四百五十頁天金函入
▼四月下旬出來

改版

信仰叢書 第一編

基督に倣ひて

古今東西に亘りて偉大なる人物の深刻な靈的體驗の記錄は其數少からずと雖も、其中にありて嶄然頭角を顯はし、歳月の進むと共に愈光輝を增し加へゆくは聖アウグステイヌスの懺悔錄と本書とである。此二書は實に世界を通じて信仰修養書の双璧である。トマス、アケンピスは七十年の長日月を修道院の一僧房にありて孤獨と沈默とのうちに送り、密室の祈禱と瞑想とに浸り、徹底的に內面生活を辿つた。その怖ろしき迄に高く且つ深き信仰經驗を記したのが本書である。己が靈魂の核心に透徹することは即ち萬人の心に透徹することである。トマスの白熱的信仰は本書を通じ、凡ての人の心を把握し、此を聖きもの高きもの永遠なるものへと拉し去らねば止まぬのである。淺薄皮相の安價なる斷版的生活に惱まざるゝ我等は本書によりて確固たる永久の基礎を得ればならぬ。

▼中山昌樹譯　聖アウグステイヌス　懺悔錄（近刊）

325
1441

終